

編集室から

熊本・大分地域を見舞った此の度の大震災で被災された方々、ご縁ある方々に心より、御見舞い申し上げます。一日も早い復興を北陸より祈念し、何かお手伝いできることがないか、仲間と模索しております。

さて今年、金沢の桜は見ごろが短かったような気がしています。開花から満開の時期に掛けて温暖な日々が続いたからでしょうか？

御花見気分はすっかり抜けていたある日。会議で奥能登に箸を運びました。するとどうでしょう。能登の背骨のような丘陵地帯を走る能登里山海道の沿道を始め、彼の地の里山には山桜がちょうど見ごろに咲いていました。

山桜は、花が咲き時期だけ、そこに桜の木があることに気づけます。まるで、年に一度だけわが存在を誇るかのようです。

広葉樹の芽吹き、針葉樹の深い緑が織り成す里山には、絨毯か織物のように実にさまざまな色合いの緑色がちりばめられ、その中に点在する桜が、また見事です。

この時期の山様子を「山笑う」と言います。生命の躍動が風景に現れ、木々が輝くような光景に見事な表現だと思います。

調べてみると、夏は朝霧に苔蒸した岩肌がしっとり濡れ、葉からこぼれる様子を指して「山滴り」。秋は、錦の紅葉に「山装う」。風は、深い雪に閉ざされ静寂に包まれ「山眠る」。人間の暮らしだけでなく、山々に棲む動植物の生命感・気配にまでも想いを遣る情緒豊かな言の葉に、なんともいえない豊かさを感じます。

一方、被災された方々の心情を踏みにじるような被災地報道、寄付表明や被災地の産物・お酒を飲もう！に対するネットでの不謹慎狩りに、根深い違和感を抱いています。安っぽい正義感に惑わされたわけではないでしょうか。（は）



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。上京された際、ご利用になってみてください。もちろん、川畠さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara
03-6427-8183
17:00～24:00
金曜17:00～28:00日曜祝休
渋谷区道玄坂2-19-3
ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2016/05
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

2016/05
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

泉 月



みごとな藤で有名な磯部神社
富山県氷見市にて

**負けるな
熊本！大分！**
被災地応援に逆効果の
過剰自粛は、再考を！

濱のつばやき 『復る』

この度の熊本大地震で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に心より御見舞い申し上げます。

長年、地震観測の現場に携わってきた専門家にも未経験と言わしめる程の大規模地震が複数回発生し、余震の回数も過去最多を記録するなど、現地の状況は想像を絶していると拝察している。

ちょうど五年前に発生した東日本震災では、発生の三カ月後に現地入りした。津波の怖ろしさ、被害拡大の壮絶さを思い知らされた。それが、今回は、複数回の激震。最初の地震でかろうじて残った家屋であつても、これほど何度も見舞われれば溜まったものではない。市民の誇りである熊本城の被災した姿は、市民の方々にどんな想いを抱かせているだろうか。

九年前に発生した能登半島地震で我が家も被災したが、一度の震度六強で、壁に留めてあつた家財道具も含め、屋内は足の踏み場が無かつたほどだった。

熊本には知人が少なくない。何人かとは、すぐにSNSで安否確認がとれた。それ以外の方々と多数日に電話で無事なお声が聴けた。

災害後の被災地には、救助・復旧、復興、振興という局面が待ち受けている。特に、初期の救助やインフラの復旧には、高い専門的知識・技能が求められる。大規模災害ほど素人が素手で人海作戦では、歯が立たない。当初、現地でボランティアの受入を断つたのは、無理もない。

東北での活動の際、現地でベースキャンプを張り、長期的に支援をしているNPOからボランティアに際して幾つかの指定があつた。被災三カ月後でさえ、靴底に敷く鉄板が必携だった。被災家屋の片付けなどで、釘など踏み抜くなどの怪我、そこからの感染症防止対策が求められているからだ。長靴の底に鉄板を敷いて歩くと、すぐに疲れてしまう。指先が曲がらないから、足全体でペタンペタンと歩むしかない。手も軍手ではNG。工事用の分厚い革手袋が指定されていた。

被災地の報道がなされると、一刻も早く現地入りしたい気持ちにかられるのは、無理もない。しかし、わが身の宿泊と飲食の手当てなしに現地向かうのは、返って現地に迷惑を掛ける。件の長期支援NPOは、温泉施設付きキャンプ場に交渉してベースキャンプを設営し、ボランティアは全員自分用のテント持参、米持参を求めていた。百人を超える規模のボランティアのために自前の炊き出しを行つていた。弁当箱になる密閉容器を持参せよとのことで、朝頂いた食事の一部をそれに詰め、これが被災現場での昼食となつた。この例は余りにも見事だったが、被災地に長期的に入るには、それなりの備えと設えが要ると、痛感させられた貴重な体験だった。

一方で、ツイッターを中心に、俄か評論家と化した一部の人が、不謹慎な発言を狩る行為が蔓延しているらしい。被災された方々、そのご縁の方々の心中を察するに、不謹慎狩りに走りたい心情は判る。今回の地震直後、すでに十分な周知時間があつたにも関わらず、ツイッターで脳天気ハッピーを連呼した某弱小野党の元党首Fなどは、相変わらずの時局感に欠けた無神経さを露呈して響を買い、後に謝罪に至つたらしい。政治家・著名人の不謹慎な発言に対して神経を尖らせるのは、社会的地位からも止むを得ないが、これが一般の人々にまで及び、被災地のお酒を飲もうという呼びかけに対しても不謹慎狩りの対象とされている点は、大いに疑問である。

被災地域の一日も早い復興を願い、望むのであれば、彼の地の経済復興を支援するのは当然である。それは、被災地の産物を購入することに他ならない。ボランティアに駆けつけられない事情があつても、一消費者としてだれでもが参加できる最も容易でかつ実効性のある被災地支援の行動だ。この重要な経済的支援を、表面的な心情で「不謹慎」と即断してしまう単純さの方が、むしろ社会の実態に対する無見識、世の中をより深い部分から理解しようとする意志の無さを自己表明してしまつていないか。

今回被災した熊本地域には、もう一つ気になる点がある。今年十一月、熊本県全域を会場に全国地域づくり大会が開催される予定なのだ。そして、五年前。東日本震災の年も熊本での開催が予定されていた。がこの時、実行委員会は苦渋の決断として開催を自重された。「その時」があるだけに、開催に対する熊本の方々の尋常ならぬ熱き想いをひしひしと感じていた。それ故に、今回の全体大会開催に関するご当地の動向が気にかかる。

前回は、遠き被災地への慮りで断念されたが、今回は自らが被災地となつた。その復興の契機とするためにも開催するという考え方。いや、現実的に幾らなんでも開催は無理だろうという考え方。いずれも成り立つ。そのいずれにされようとも熊本の方々のご意志・判断を暖かく見守らせて頂きたい。そして、もし万難を排して開催された暁には、何をさておいても現地に駆けつけ、その心に大いに触れ、語り合いたい。

それまでの期間、たとえささやかであつても自らにできることは何か。何が被災地にとって本当の支援・応援につながるのか、一つ一つじっくりと見えていきたいと思ふ。



プロ棋士の凄さを示す例え話がある。

「電線から一斉に飛びたった数百羽の雀の数を正確にカウントできる。それも一羽、二羽と数えるのではなく、その瞬間の光景を目に焼きつけて」

常人にはない特殊能力であるとともに、人間の脳の奥深さをも表すような例えであるが、これはむしろ、コンピュータの得意分野である。加えて、「怖がらず、勝ちたいとも思わない。そして疲れしない」という強みをコンピュータは持つのに対し、人は、「相手の強さに怖気づき、勝ちを欲するからこそ冷静さを失ったり緩んだりする。そして集中力を長時間持続できない」

コンピュータ的な能力に秀でたプロ棋士。しかしながら彼らも血の通った人間。だから時々、コンピュータと違って間違える。ではなぜ、これまで勝っていたのだろうか。

パターン認識はコンピュータが苦手としていた分野である。渋谷のスクランブル交差点で恋人を探すとしよう。

「人がコンピュータに見分けるポイント（体型、髪型、顔の特徴等）を教え、与えられた恋人のデータに近い人物を通行者のなかから特定」

これが従来の手法であるが、速度や精度で人と大きく見劣りする。それが今、「恋人を含む膨大な人物の画像から、恋人の概念をコンピュータ自身が見つけ、それに近い人物を通行者のなかから特定」という人工知能へと進化している。この学習・認知手法は、私達が生まれ落ちてから物事を学んでいく過程に近い（というよりも真似ている）。そして、人はそれをゆっくりと学んでいくのに対し、コンピュータは処理速度や記憶容量の飛躍的向上により、人より遥かに速くそれを獲得するのである。

将棋や囲碁で勝つための最も重要な能力の一つは、想定場面での優劣評価が正確であること。ここでパターン認識の能力が問われる。

将棋のある場面において、10手後の想定図を評価し次の一手を決めるとする。コンピュータは従来、駒の損得、攻めの戦型、守りの固さ等にプログラマが設定した点数をそれぞれ与え、膨大な数の想定図に優劣をつけることで、次の一手を判断していた。

それが人工知能だと、データベースや多くの実戦から学習したコンピュータが、優劣の概念、すなわち評価関数を自ら生成し、それを元に10手後の想定図を評価することで、次の一手を判断するという手法になる。

渋谷のスクランブル交差点にて、恋人をスマホに探させる時代が、すぐそこにまで来ているのである。

7月の参院選挙（もしくは衆院とのW選挙？は震災でNGか...）から18歳以上にも選挙権が与えられるという話はもう周知かと思いますが、それと合わせて昨今は刑法の対象年齢の問題など、さてコドモとはいつまでの事を指し示すのか？という議論が出ております。つまりいつから“オトナ”と定義づけられるのかということです。

法律上の解釈で単純に定義するならば20歳ということなのでしょう。武家社会の時代には14～16歳の元服がコドモとオトナの境目でした。また、現代においては経済面での親からの自立をもってオトナになったと見る親御さんからの感情的側面もあるかと思えます。世間の一般的見解としては後者が実態に即していると考えられる方が多いのではないのでしょうか。

では、経済的な自立って何をもって定義されるのでしょうか。

- ・毎月の親からの仕送りがなくなる？
- ・結婚をして奥さんや子供を食べさせていけるようになったら？
- ・マイホームを建てる？
- ・親に仕送りをする？もしくは経済的な面倒をみる？

等々あります。どれもふんふんそうですねという感じです。

現在日本という国家・経済ユニットにとって最も大きな社会問題である少子・高齢化をきっかけとした

細りゆく内需。特に第三次産業の従事者比率が高い日本にとって大きな問題

若年層における社会保障負担の増

戦後の産業構造のありかたや、国の国土開発計画の問題など

引き起こした要因は様々ですがここでは割愛いたします。

そんな一方、富裕層および高齢者を中心に約1700兆円もの個人資産が眠っているとされレバレッジを効かせた金融資産・海外資産への投資などによって一部の層に富が集約されるといった現実が起きています。

そこで政府としては、生前贈与の非課税の対象となる範囲や金額の拡大によってカネを市場に循環させていく政策をとっているわけですが、これもまた、ある程度の富を保有している層にとって恩恵があるだけです。また結局はお金持ちの親世代にしがみつく子供世代という構図は変わらないという事です。

私見ではありますが、非課税となる生前贈与をやめ、相続税率を上げて（今年から一部下がっている状況）一度国の資産を潤沢したうえでどう再分配するのか？という議論があってもいいと思います。私は国が行う財政政策には反対の立場ですが、今一度公平な観点から資産の適正な分配については議論すべきと考えます。でもそんな方針や政策を打ち出すと選挙に勝てないからどの政党もしないでしょうが。。。

このような状況では日本の成人はいつまで経ってもコドモからの脱却ができないという気がします。

子供と小供について生前贈与ってつまりはまだ大人になれないこと？

『富士の国から ~大魔神のたび~』 金時公園再整備のお話
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

小山町に来て2年が経とうとしている3月、指示された町長特命事項は進んでいるのか？を気にしていた。

その一つに「金時公園の再整備」がある。小山町は金太郎生誕の地であり、それにちなんだ公園がある。昭和9年に造られ、子供が多いときには児童会館もあった。使われなくなったプールが荒れ始め、コンクリート製の地球儀もただの醜い塊となっている。5月3日こそ金太郎春祭り賑わうが、普段はゲートボールプレイヤーが集っている程度だ。金太郎ゆかりの公園であることを期待して訪れた方々を裏切っていることは容易に予想がつく。

ここを何とかリニューアルしたい。東海大学建築学科の杉本教授のお力を借り、住民とのワークショップで意見も取り入れながら26年度末に再生案の絵はできたが、高額な整備費を用意できる余裕がない。しばし保留かと、今年度に入りただ時間のみが過ぎていった。

そこに救世主のように現れた「ふるさと納税」。その企画を任された小生は、当然小生の事業を寄附の目的先に加えた。「金太郎のふるさとづくり」がそれだ。9月から始めたふるさと納税の返礼、4か月で8億円。このまま行くかと期待を膨らましたが1月以降はしばみ3月末までに9億円に達することが難しくなっている。でも夏以降には復活し29年度末には20億円は達成できるものと思っている。「金太郎のふるさとづくり」には3%の寄附が集まっているので6000万円が見込める、これに国庫補助を加えれば何とかなる。動き出す気になった。

金時公園の図面を可能な工事費の範囲で見直した。その絵を地元の皆の前に出した。

「金時神社らしくするのは結構だけど参道で広場が分断されると、金太郎祭りのときに困る」「常設の土俵があると普段の時に邪魔だ」「駐車場からトイレが離れていると使いにくい」「雨水排水は調整池が必要」出された意見は板書していく。皆の前に見えるようにしないと、言った意見が無視されるのではと思われてはいけないので、必ず板書することになっている。この時に反論はしない。



とにかく言いたいことはすべて吐き出していただく。

板書に目を通した杉本教授はおもむろに図面の上にマジックで、線を書き入れた。出された意見を最大限取り入れる形での提案だ。皆、頷いた。「次回はこれを図面にして、また皆さんの前に示すので、ご意見をください。こうして案に磨きをかけて設計を進めることにします。」で会を閉めた。この間、わずか1時間。皆の集中が途切れず「いい対話」になった。

2回目を開いた。公園のゾーニング、考え方に皆は納得した。各論に入ると「土俵を常設にするのか」「広場を芝にすると管理がしきれない」「具体の雨水対策は？」との意見が出された。「土俵は金時公園のシンボルである。ただ、位置を再考したい。」金時神社を背景に金太郎祭りでの相撲観戦にもある程度四方から見るようにとの位置にずらし、常設であることは皆が納得した。雨水対策は広場の下を調整池にできる具合のいい既製品ができていたので、それを採用し十分に確保できそうだ。

最後に“芝”のこと、これは意見が白熱した。「鳥獣被害もある、フンも落ちてようになる、何より草取りも大変だ、町が管理してくれるのか？」芝でなくする意見満載。「わかりましたよ、ならばアスファルト舗装にしますか、しかも緑色に塗って？公園の広場を」と言ってみた。さすがに黙った。

実施設計の段階で引き続き対話を続けることにし芝のことは保留としたが、小生の腹は決まっている。「管理が楽だから芝ではなく土にしました」って、今回の対話に集まった年配の方々は孫子に胸張って言えるのか？

「芝にして皆が喜び集う公園にした、管理は大変だけど、その作業によってコミュニティが盛んになったし、ここに住む皆が元気になった」と言葉に出ようするのが小生の役割なのだ。

そこで、芝を知ってもらうための研修会を開くことにした。にがりをまいて固くした高校グラウンドの芝生化に成功した芝生博士が講師だ。

さらに工事の予算が不足すれば、皆でできるところは施工してもらおうとも考えにある。加えて、金太郎つながりの岡山県勝央町、京都府福知山市にも何かおねだりしようと思案している。

多くの方々の力を寄せていただき造ること、そして育てることがあってこそ皆の誇れる金時公園になるものと信じている。2年後にその姿を見せるようにすることが町長からの特命事項なのである。まだまだ課題はあるけど平成30年5月3日の金太郎春祭りになんとしてでも間に合わせたい。

